

## もう罪を犯してはなりません

ヨハネの福音書 5章 10-18節

### はじめに

今日の聖書箇所は、「ベテスダの池」で38年も病気にかかっていた人が、イエス様に癒された出来事の続きが書かれています。この人が具体的にどんな病気であったかは分かりません。彼は横になっていて、イエス様に「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われて癒されたので、おそらく自分の足で歩けない何かの病気であったと思います。また彼が、生まれつき病気であったのか、人生の途中で病気になったのかも分かりません。ですから彼が中年であったのか、老人であったのかも分かりません。とにかく分かっていることは、38年という途方もなく長い年月の間、病気であったということです。

### 1. イエスと癒された人

彼が癒されたのは、「安息日」でした。ユダヤ教の安息日は、週の七日目の土曜日です。正確には、金曜日の日没から土曜日の日没までの間です。「十戒」の第四戒には、「いかなる仕事もしてはならない」とあります。なぜなら、「六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから」です。神様は六日間でこの世界と人間を造り、七日目は創造のわざをやめて休まれたのです。その神様の模範に倣って、ユダヤ教では週の七日目の土曜日に、休まなければならないとされているのです。

そこで問題となるのは、安息日にしてはならない仕事とは、具体的にどんなものかということです。ユダヤ教の古い規則には、安息日にしてはならない39の仕事があったそうです。そこには、「物を運ぶこと」も安息日にしてはならない仕事の一つであったのです。

38年も病気にかかっていたイエス様に癒された人は、イエス様に「起きて床を取り上げ、歩きなさい」と言われたので、自分が寝ていた床、つまり布団やマットのような物を担いで歩いていたのです。するとユダヤ人たちに見つかって、10節にあるように、「今日は安息日だ。床を取り上げることは許されていない」と言われてしまうのです。つまり彼は、安息日に物を運んでいる律法違反者と見られたのです。彼はこの時、38年という途方もなく長い年月の間、病気であったのが癒されたのです。しかしユダヤ人たちは、彼が癒されたことよりも、彼が律法を破ったことに関心を寄せているのです。38年の間病気であったのが癒されたのだから、彼を見つけたら、まず「良かったね」と一声かけて喜んであげても良さそうなものですが、ユダヤ人たちは病気のことは一切触れず、ただ彼が律法を破ったことだけを指摘したのです。律法の中心は、「愛」です。神様を愛し、隣人を愛することが律法の中心です。しかしユダヤ人たちは、その肝心な愛を見失って、ただ律法を守ることに必死にな

っていたのです。律法を具体化して、細かい規則をいくつも作って、それを厳密に守ることに縛られて、守らない人を裁いていたのです。彼らは、律法の本来の目的である愛を見失って、律法を守ること自体が目的となって、細かい規則に雁字搦めになっていたのです。これが当時のユダヤ人たち、特に律法学者などの宗教指導者たちの姿です。

彼は、ユダヤ人たちに律法違反を指摘されて、11節でこう答えます。「**私を治してくださった方が『床を取り上げて歩け』と私に言われたのです**」。彼はここで、確かに事実を伝えているように見えます。しかし彼は、言い逃れをしている、イエス様に責任転嫁をしているとも見えるのです。「私が悪いわけではない、イエス様が悪いのです」と言っているようにも見えるのです。彼は、ユダヤ人たちに律法違反を指摘された時、「すみません」とだけ言えばよかったのです。しかし彼は、「私は命じられたからやっているのだ」と、ユダヤ人たちの関心をイエス様に向けさせるのです。

事実、ユダヤ人たちは12節で彼に、では「**『取り上げて歩け』とあなたに言った人はだれなのか**」と言って、ユダヤ人たちの関心はイエス様へと向かっていきます。しかし13節を見ると、彼はイエス様が「**だれであるかを知らなかった**」とあります。彼は、イエス様の名前を知らなかったのです。普通、38年も治らなかった病気を癒してくれたなら、その人の名前ぐらいは聞くものです。そしてちゃんとお礼ができるように、その人のことを知ろうとします。しかし彼は、イエス様について何も知らないのです。自分が癒されたことに舞い上がって、イエス様にまで関心がいかなかったのかもしれませんが。

我に返った時、彼はイエス様にちゃんとお礼を言うために、イエス様をちゃんと知るために、イエス様を捜すこともできたでしょう。14節を見ると、「**後になって、イエスは宮の中で彼を見つけて言われた**」とあります。彼は、イエス様を捜したとは書かれていません。むしろイエス様が彼を捜して見つけられたとあります。そしてイエス様は彼にこう言われます。「**見なさい。あなたは良くなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪いことがあなたに起こるかもしれません**」。このイエス様の言葉をどう理解するかは議論の分かれるところですが、ヨハネの福音書において、「罪」というのは、個々の具体的な罪、盗みとか姦淫とか殺人とかを意味するのではなく、イエス様を否定すること、イエス様を受け入れないことを「罪」と表現していると言われます。ヨハネ1:10-11には、こうあります。「**この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった**」。神様がこの世を救うために遣わされたイエス様を受け入れないこと、この天地を造られた神様、そしてイエス様に背を向けて生きること、それをヨハネの福音書は「罪」と表現しているのです。

その意味でイエス様が彼に、「もう罪を犯してはなりません」と言われたのは、「あなたはわたしによって癒された、だからもうわたしを否定してはならない、わたしに背を向けて生きてはならない、わたしを受け入れて生きていきなさい」という意味だと思ふのです。ではイエス様を否定し、背を向け、受け入れないとどうなるのでしょうか。ヨハネ3:16には、「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人と**

**して滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」と**あります。神様が遣わされたイエス様を信じ受け入れる人は、永遠のいのちを持ちます。つまり救われます。ではイエス様を信じない人、受け入れない人はどうなるのでしょうか。それは「滅びる」のだと聖書は言います。イエス様は、イエス様を否定し、背を向け、受け入れないと「もっと悪いことが起こる」と彼に言われました。38年の病気よりも「もっと悪いこと」とは何でしょうか。それは「永遠の滅び」ではないでしょうか。永遠に神様から捨てられることではないでしょうか。

イエス様はここで、彼を招いているのだと思います。「あなたはわたしによって癒された、だからもうわたしを否定してはならない、もうわたしに背を向けて生きてはならない、これからはわたしを信じ受け入れて歩みなさい」と。私たちもそれぞれ、イエス様の何らかの恵みに与かっているのではないのでしょうか。イエス様は「もう罪を犯してはなりません」と言われます。私たちは今でも個々の具体的な罪を犯してしまいます。しかし私たちは決して犯してはならない罪があるのです。それは、イエス様を否定することです。イエス様に背を向けること、イエス様を受け入れないことです。そうでないと、「もっと悪いことが起こる」のです。それは「永遠の滅び」であり、永遠に神様から捨てられることなのです。

では彼は、イエス様の招きにどのように応えたでしょうか。15節を見ると、「**その人は行って、ユダヤ人たちに、自分を治してくれたのはイエスだと伝えた**」とあります。ここでも彼は、ユダヤ人たちに事実を伝えているように見えます。しかし彼は、イエス様を彼らの手に渡しているとも見えるのです。私に律法違反するように命じたのは、イエス様だと通報しているようにも見えるのです。事実、16節を見ると、「**そのためユダヤ人たちは、イエスを迫害し始めた。イエスが、安息日にこのようなことをしておられたからである**」とあります。ユダヤ人たちの関心や敵意は、完全に彼からイエス様へと移されています。律法違反の首謀者は、イエス様だということになっているのです。

彼には、イエス様への愛があったのでしょうか。彼は、イエス様のことを知ろうともせず、律法違反の責任をイエス様になすりつけ、律法違反の首謀者はイエス様だとユダヤ人たちの手に、イエス様を渡しました。彼は、38年の病気をイエス様に癒されたにも拘らず、イエス様に背を向けたのではないのでしょうか。そしてイエス様に背を向けるその罪こそが、イエス様に対するユダヤ人たちの迫害を引き起こしたのです。そして最終的には、イエス様を十字架の死へと追いやっていくのです。

私たちは知らなければなりません。イエス様を否定する罪、イエス様に背を向ける罪、イエス様を受け入れない罪が、結果的にイエス様を十字架につけていくことになるのだということ。そしてそのような罪は、実は私たちの中にもあるということ。私たちは知らなければなりません。私たちはそれぞれイエス様の何らかの恵みに与かっています。イエス様は天地を造られた方であり、私たちの救い主であるからです。それにも拘らず、彼のようにイエス様に感謝もせず、イエス様を知ろうともせず、自分だけに関心を持ってきたということはないのでしょうか。その意味で、イエス様を否定し、イエス様に背を向けてきたということはないのでしょうか。そうであるならば、私たちもイエス様を十字架につけた一人であるの

かもしれません。二千年前のイエス様の十字架の死は、決して私たちと無関係の出来事ではないのです。

## 2. イエスとユダヤ人たち

さて、ユダヤ人たちの関心と敵意は、イエス様へと向かっていきます。そこでイエス様は、17 節で彼らにこう言われます。「**わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです**」。イエス様はここで、なぜご自分が安息日を破るのかを説明しておられます。安息日は、先ほども言いましたように、仕事をしてはならないのです。休まなければならないのです。なぜなら神様は六日間でこの世界と人間を造り、七日目は創造のわざをやめて休まれたからです。これが安息日の根拠となっています。しかしここで問題となるのは、神様も毎週の安息日に休まれるのか？ということです。神様は、この世界と人間を造った後、ご自分が造られた世界と人間を今も保ち、導いておられます。これを神様の「摂理」と言います。その意味で、神様がもし休まれたら、たちまち世界と人間のすべての活動は停止してしまいます。世界と人間のすべての活動と命を今もなお支えておられるのは、神様です。詩篇 121 : 4 には、「**見よ、イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない**」とある通りです。

神様は、六日間でこの世界と人間を造り、七日目は休まれたとありますが、創世記 2 : 2-3 を見ると、こうあります。「**神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである**」。ここには、神様が「休まれた」とは書かれていません。ただ「なさっていたすべてのわざをやめられた」「なさっていたすべての創造のわざをやめられた」とだけあります。神様が「休まれた」というのは、「何もしなかった」ということではありません。神様が「休まれた」というのは、ただ「創造のわざをやめられた」というだけのことです。何もしなかったわけではありません。神様が何もしなかったら、神様がせっかく造られた世界と人間のすべての活動は停止してしまうからです。神様は、七日目に「創造のわざ」はやめられたけれども、「摂理のわざ」はやめられなかったのだと思います。その意味でイエス様は、「わたしの父は今に至るまで働いておられます」と言われているのではないのでしょうか。神様は、安息日も働いておられるのです。神様は決して安息日に休んでおられるわけではないのです。神様は安息日にも、世界と人間のすべての活動と命を支えるために、働いておられるのです。

では安息日は何のためにあるのでしょうか。イエス様はマルコ 2 : 27 で、こう言われました。「**安息日は人のために設けられたのです**」。安息日は、神様が休むためにあるのではなく、私たち人間が休むためにあるのです。神様は安息日にも働いておられるのです。では私たちはなぜ安息日に休まなければならないのでしょうか。それは、神様の働きに与るためです。私たちは日常忙しく働いていると、なかなか神様の働きに思いを寄せることがありません。自分の仕事で心と思いはいっぱいになってしまいます。しかし安息日に、仕事の手を休めて

心と思いを神様に向けると、神様の働きが見えてくるのです。神様の恵みが見えてくるのです。日常の忙しい生活の中では見えてこなかった神様の働きと恵みが、安息日には見えてくるのです。私たちは、神様の働きと恵みがよく見えるようになるために、安息日に仕事を休むのです。安息日は、「何もしない日」ではありません。安息日は、神様の働きと恵みをよく見る日、思いを寄せる日なのです。神様の働きと恵みは、教会の礼拝を通して、最もよく見え、語られます。だからこそ私たちは、安息日に教会の礼拝に行くのです。

イエス様は、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです」と言われました。18節には、イエス様は「**神をご自分の父と呼び、ご自分を神と等しくされた**」とあります。イエス様は、神と等しい方、また神様ご自身です。イエス様は、神ご自身であるので、安息日も働かれるのです。神ご自身であるので、安息日にも人を癒されるのです。

### **おわりに**

キリスト教の安息日は、週の初めの日の日曜日です。それは、イエス様が十字架の死から復活し、よみがえったのが日曜日だからです。キリスト教は、このイエス様が復活した日曜日を安息日とし、共に集まり礼拝をささげるようになったのです。神様とイエス様は、安息日も働いておられます。神様は、安息日にイエス様をよみがえらせ、イエス様は、安息日のすべての礼拝にご臨在されます。そして私たちを癒し、もう一度疲れた魂をよみがえらせようとしておられるのです。私たちは、安息日に休まなければ、神様とイエス様の働きと恵みが見えなくなってしまいます。安息日は、「何もしない日」ではありません。安息日は、神様とイエス様の働きと恵みをよく見る日、思いを寄せる日です。そして、私たちは安息日に、「見なさい。あなたは良くなった。もう罪を犯してはなりません。そうでないと、もっと悪いことがあなたに起こるかもしれません」というイエス様の招きの言葉を聞くのです。私たちは、神様とイエス様の働きと恵みにすでに与っています。ですから私たちは、神様とイエス様を決して拒んだり、背を向けたりして生きてはならないのです。イエス様は私たちに、神様とイエス様を信じ受け入れて、永遠のいのち、救いに与ることを願っておられるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは日々、あなたの働きと恵みに与りながらも、いつも自分にばかり関心を持ち、あなたを知ろうとせず、あなたに感謝をささげることも少ない者です。どうか週に一度の安息日に、仕事の手を休めて、あなたとイエス様の働きと恵みに思いを寄せることができますように。そして、私たちの疲れた魂を癒し、疲れた魂をよみがえらせ、あなたとイエス様の働きと恵みがよく見えるようにしてください。そして一週間を、あなたとイエス様の働きと恵みの中に生かしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。